

FD 研修会：留学生への接し方，指導のあり方

特別支援教育コース 加藤哲則

1 研修の概要

令和 5 年度第 7 回 FD 研修会・意見交換会

2024 年 1 月 11 日(木) 14:30～16:00

講師：国際連携推進機構 国際教育支援センター・高橋志野先生

話題提供の要旨

- ①「留」学生とは何か
- ②「外国＝異文化で暮らす」とは
- ③共通言語でコミュニケーションする際の配慮，の 3 点について説明され，やさしい日本語によるコミュニケーションの具体的な例を提示された。

2 FD 研修会での学び

今回の FD 研修会では，留学生への接し方，指導の在り方をテーマに話題提供があった。外国＝異文化で暮らす際の状況を説明されたスライドの内容が，他のマイノリティを理解する際にも応用できると考えられた。

スライドには，異文化＝「異なる常識」の世界→善し悪しや優劣ではなく単純に「異なる」「常識」だから意識化／明示化されにくい。その文化圏の人々にとっては「当たり前」で理由を説明しようがない。そもそも節目にの要を感じない。だからこそ，異文化・自文化を意識化（≒言語化）する努力が必要と示された。これは，例えば新入生で県外から来る学生や障害のある学生も留学生と同様に感じている可能性が考えられる。愛媛県では当たり前のことが他県では当たり前ではない，障害のないとされる学生には当たり前のことが障害がある学生にとっては当たり前ではない。日常的に行っている講義場面においては，大学教員にとって当たり前のことが受講生にとっては当たり前ではない可能性まで考えながら対応することが重要であると考えられた。

さらにスライドでは，ホスト社会による配慮のための 3 つのキーワードとして，合理的配慮・ダイバーシティ・ポジティブアクションが示された。合理的配慮とは正に種々の障壁を取

り除くための必要な変更や調整であり，ダイバーシティは文化的・社会的多様性であり，ポジティブアクションは積極的な格差の是正を行うことである。こうした対応は，留学生のみならず様々な学生に対応する際の基本的な考え方として有用であると考えられる。これまでの大学という社会で生活をしていると，つつい当たり前であると思ひ込み，学生のもっている常識とのズレに意識を向けられなくなっている可能性を感じる事ができた。今回の研修内容では，正に当たり前を意識化・言語化して，講義や学生指導を行わなければならないことを学んだ。

最後に「やさしい日本語」を例とした母語が同じ人同士のコミュニケーションとは異なる配慮が必要であるという提言も，示唆に富む内容であった。外国人留学生に向けた「やさしい日本語」の活用は話題ではあったが，その中で示されたやさしい日本語にするためには，難しいことばを使わない+荒川(2016)の「はさみの法則」は，講義や学生指導においても有用であると考えられた。スライドに示された，抽象的，複雑，非日常的，書き言葉的，漢語が多いことばよりも，具体的，担寿運，日常的，話し言葉的，和語が多いことばを使って話すことは，講義の中でも学生の理解しやすさにとって重要であると考えられた。同様にはさみの法則の，「はっきり言う」「さいごまで言う」「みじかく言う」ことも講義や演習内での指示伝達には，有効であると考えられた。長文や複文を避けて明確に伝える言葉遣いは，音声のみで伝達する際には時に気をつける必要があると考えられた。

3 まとめ

今回の FD 研修会は留学生を対象とした内容であったが，実際にはあらゆる学生への接し方や指導のあり方として，重要な示唆を得ることができた。新年度入学してくる学生へのガイダンスや日常の講義においても，相手の立場をよく考えて，当たり前を言語化し明確に伝えるような対応を心がけたい。